

# センター試験リスニングテストの指導について

木村 孝

## 1. リスニング指導の開始時期

センター試験リスニングに対する指導の開始時期については、早ければ早いほうがよいという考えのもと指導を行っています。リスニングに対する指導が早ければ早いほど、生徒のリスニング力を向上させようとする意識が早い時期に固まります。意識づけの一環として、基礎的な内容のリスニング演習を高校1年生の1学期中間考査後から実施します。30分程度の本格的なリスニングの問題演習を高校1年生の2学期頃に授業の中で1度実施します。そのリスニング問題は、高校1年生の2学期頃で十分対応できるレベルのものを与えます。そのリスニングテストを受験させた後、センター試験のリスニングテストの過去問(1年分)を受験させます。当然ほとんどの生徒たちはセンター試験の過去問に正しく解答できません。特に第4問に関しては壊滅状態です。それら2種類のリスニングテストの実施後、2つのリスニング問題の得点結果の比較だけで終わるのではなく、それら2つのリスニング問題の問題構成の違い、センターリスニングテストでの不正解問題の正解に至るまでの力の開き、語彙力のなさ等を生徒に気づかせます。読み上げられる英語のスク립トを見て、センター試験問題のリスニングの音声を再度聞くことで対応しなければならないスピードを再確認し、また読み上げられる英文に対する自らの情報処理能力の欠如を生徒たちは認識します。そのような“気づき”をできるかぎり早い段階で与えることで、生徒の中でリスニング問題に対して何とかしていかなければならないといった意識が早い時期に生まれてきます。そのような早い段階での“気づき”を生むことがリスニング指導を早くに導入する最も大きな目的です。そのステップを踏むか踏まないかでその後の生徒達のセンター試験を意識したリスニング指導やリスニング問題の演習に対する姿勢に大きな違いが生じてきます。

## 2. リスニング指導の量と頻度

次にセンター試験リスニング問題に対する指導・演習にあてる時間・量についてです。当然それらにあてる時間や量は多ければ多いほどよいという点は間違いのない事実です。コミュニケーション英語や英語表現といった授業の中でそれらの授業時間を削りながら毎時間リスニング指導を行っていくことは、時間の制約上難しいと思われる先生方がおられると思います。授業時間を削らずに英語を聞く時間や量をできるだけ増やすといった観点からリスニング指導にあてる時間を確保していく方法について、例えば複数の曜日のSHRの時間の10分程度をセンターリスニング試験に対する指導に利用してもらい実施していく、あるいは昼休みを利用してリスニング指導を実施していくといったことが考えられます。

授業におけるリスニング指導の頻度については、できる限り毎授業時に行うというのが基本的な姿勢です。毎時間、短時間でもいいのでリスニング指導を行います。リスニング指導というのは実際に英語による音声を流し問題に取り組みせ解説するという内容のリスニング指導だけをいうものではありません。私が考えるリスニング指導とは、生徒に授業が終わった後、昼休みや放課後に教室、自習室、自宅等で英語を聞いてその内容を理解しようとする姿勢を育もうとする指導のすべてを言います。生徒の聴く態度を育む動機づけのすべてがリスニング指導と考えています。音楽を好む生徒がいるクラスでは音楽の歌詞の数か所をブランクにしたものを用意し音楽を聞いてそれらのブランクを埋めるといった活動を短時間取り入れたり、映画を好む生徒がいるクラスでは、DVDを用い映画の一部を放映し台詞の一部分を書きとらせる活動を取り入れたり、先生方ご自身がリスニングの力をつけるために行ってきた工夫や活動を紹介したり、リスニング力を向上させる

ために日々意識していることや現在も取り組んでいることを紹介したり、リスニング力がないことで失敗した体験談を紹介したり、リスニング力が向上したことでうまくいったことや感動できたことを紹介したりするといったことも授業時間以外の場で生徒がリスニング活動に積極的に取り組もうとする態度を育むうえで重要な点であると考えております。授業ごとにリスニングの演習指導を行うとしまでもリスニング力を向上させるために必要な量・英語の音に触れる時間はあまりにも少なすぎるのですから。

### 3. 授業におけるリスニング指導の具体的内容

リスニング問題の難易を左右する要因はさまざま考えられます。読み上げられる英文の長さ、英文が読み上げられるスピード、その英文で使用されている語彙、その英文の内容に関する背景知識の有無、読み上げられる英文に対する設問数等が考えられます。センター試験リスニング問題で生徒達が最も困難を感じ生徒の間で得点差が生じる問いとして、第4問があげられます。私が考えます第4問を困難にしている理由は読み上げられる英文の長さや設問数にあると考えています。第3問までと比較してみますと第4問は読み上げられる1つ1つの英文も長くなっています。また1文1文に対する出題ではなく続けて読まれる1まとまりの英文に対して3題出題されている点が第4問の難度を上げる要因と考えます。

第4問の問題に対する正解率を上げ、第4問に対する生徒達の苦手意識を何とか変えたいという思いで第4問A(従来の第4問B)対策として比較的早い時期から生徒に紹介してきた方法があります。なお、ここでは指導のノウハウの蓄積がある第4問Aのみを取り扱いますが、2016年度に出題された新傾向の第4問Bにおいても有効な対策ではないかと考えております。第4問Aを演習させる際、第4問Aの音声流れる前に問題用紙に書かれている設問の英文3つをすばやく読み、その3つの設問の英文から読み上げられる英文の内容を推測した後英文を聞き設問を解答していくようにという内容の指導は多くの先生方がすでにされていることと思います。しかし、生徒は問題用紙に書かれている3つの設問の英文をすばやく読み3つの設問文の英文を理解することはなんとかできたとしても、その

3つの設問を記憶にとどめたうえで(その3つの設問を記憶にとどめることができなければその3つの設問を何度も読み返し)、長い英文を聞きその流れてくる英文の内容を理解し、3つの設問に対する正答を導き出すというプロセスをふまなければ正答にたどり着くことができません。3つの設問にはそれぞれ4つの選択肢が設けられています。それらの選択肢から1つ正しい選択肢を選び出して初めて正答にたどり着くことができますが、そのような一連の作業を限られた時間内でしかも自由に聞き返しが許されない状況下で行うことはかなりの負荷となってしまいます。流れてくる英文を正しく理解するだけでも大変であるのに、3つの設問に対する正答にたどり着くには読み上げられる英文を正しく理解するといったこと以外にかなり多くの作業を受験者は短時間のうちに正確にこなさなければなりません。

生徒が正しく正答を導き出すために行わなければならない上記の作業の中で、3つの設問の記憶(3つの設問を記憶にとどめることができなければ3つの設問を何度も読み返し)という作業に対する負荷を軽減できないかと考え、生徒に提案し、指導してきたのが3つの英文の設問の内容をイラスト、記号、アルファベット、矢印、図、頭文字などをうまく用いてビジュアル化するということです。3つの設問の英文の内容をビジュアル化する意図は、それらを効果的に用いてビジュアル化することで3つの設問の内容を記憶にとどめやすくするということです。記憶にとどめやすくすることで3つの設問の英文の複数回の読み返しや、3つの設問の英文の内容の正しい記憶といった作業にかかる時間と労力の消費をかなり抑えることができます。文字で記憶する場合とイラストや記号・矢印などを用いてビジュアル化されたものを記憶する場合とでは、記憶としての残りやすさが大きく異なります。容易に設問内容が記憶として残れば、設問を何度も読み返すといった作業に対する時間と労力が削減されるため、生徒は流れてくる英文を正しく理解するといったリスニングの本来の作業に集中できます。記憶として残った3つの設問内容に的を絞って英文を2度聞くことができます。つまり3つの設問内容に的を絞ったFocus Listeningを2度行うことが可能になります。その結果、正答を導き出しやすくなります。もちろん、ある程度の訓練は必要になってきますが、その訓練

を行うだけの価値は十分にあると考えています。訓練の一例を紹介いたします。

ア)各設問を理解し記憶にとどめておきやすくなるうえで各設問の key となる語をイラスト化・記号化します。それらの key となる語のそれぞれの関係性、例えば動詞と名詞の場合それらの動詞・名詞は動詞と目的語の関係なのか主語と動詞の関係なのかといった関係性や、その他の関係性をそれら key となる語を記載する位置や矢印・等号・不等号・記号・斜線などを利用して一見して分かるように表現する訓練を行います。記載されている設問を読んでどの語が key となる語なのかを見分ける訓練はそれ以前に必要なになりますが、ここではその見分けをできるようにした後の訓練とお考えください。

イ)センター試験第4問Aの場合、問いによっては第4問Aの全ての設問に共通の語が現れる場合もあります(2013年度センター試験第4問B)。その場合、その語が全ての問いにおいて key となることが多いので、その場合も上記ア)と同様、問いの内容をビジュアル化したうえでその key となる語と各設問の内容との関係性を問いごとに頭の中に整理しやすい形、わかりやすく記憶にとどめやすい形で表記する訓練も行います。

ウ)センター試験リスニング問題第4問の設問には疑問詞(where, why, what, which, when, how)が頻繁に現れますが、疑問詞はどのように記号化するか決めておくよう指導します。Howは頭文字Ⓜでよいと思いますが、how以外の疑問詞はいずれもwで始まりますので以下に示した頭文字を用いて表記するようにし、一貫してその表記を使うように指導します。すばやく表記し、英文を繰り返し読まなくとも問いの内容をひと目でわかるよう記憶しやすいよう表記する必要がありますので、一文字で表すように指導します。whereはplaceの頭文字Ⓟ、whyはreasonの頭文字Ⓡ、whenはtimeの頭文字Ⓣ等と決めておくよう指導します。センター試験の問題は正しい選択肢を選ぶ形式なので、whatやwhichを用いた設問はどちらも尋ねる内容はほぼ同じになります。よってwhatもwhichもⓂで表記するよう指導しています。また、〈描写する・関係する・述べる・提案する・持つ(抱く)・得る・望む・好む・示す・思う(考える、感じる)等々〉といったリスニング問題の設問で比較的

よく使われる動詞は自分なりに一見して理解できるように、かつすばやく書き留めることができるようにイラスト化するよう指導しています。

エ)第4問Aの設問20～22に対する正答となる選択肢に記載されている英文は、リスニング問題で読み上げられる英文の中で問20～22の答えとなる箇所の英文をparaphraseした英文が正答の選択肢に掲載されている場合が多くあります(2013年度センター試験第4問B等)。そのためparaphraseされた英文に触れparaphraseに慣れるという訓練も必要と考えています。容易に教室で行える指導例として、コミュニケーション英語IやIIの教科書に付属されている本文をparaphraseした英文を利用することがあげられます。paraphraseされた2～3の英文を読み上げ、そのparaphraseされた英文の元の英文は教科書のどの文章なのかといった問いかけを授業中の数分間を用い行います。そのような活動を取り入れることでlisteningの訓練だけにとどまらずparaphraseされた英文に対応する教科書の英文のそしゃくにもつながります。またparaphraseされた英文に用いられている語彙・表現も身につくといった付随的効果も期待できます。センター試験リスニング問題の第4問Aで行われているparaphraseは、2014年度リスニングテスト問題第4問Bでも見られるようにそれほど高度なparaphraseではなく、また全文ではなく一部分のみのparaphraseが多くみられます。2年生後半や3年生では、上記のような活動だけにとどまらず教科書のいくつかの英文を時間の許す限り辞書などを用いてparaphraseさせるといった訓練も取り入れていくことはリスニング対策だけに限らずさまざまな点で効果的と考えます。

オ)また第4問の指導に関して英文が2度読まれるという点に着目し指導しているのが消去法を有効に使うということです。3つの設問にはそれぞれ選択肢が4つ存在します。その4つの中の1つが正解ですが、その正解を1度聞いただけで導き出せるのが確かに理想的です。設問によっては、それが可能な設問も確かに存在します。しかし、個々の生徒の能力にもよりますが平均的な生徒の問題処理能力などから判断してそのような設問は3問中1問あるかないかです。そこで生徒には2度英文が読まれるのだから1度目のリスニングで4択から2択にすると

いう聞き方をしようと提案しています。4つの選択肢のうち2つを消去するという作業はそれほど細かいリスニングができなかったとしても、ハードルの高い作業ではありません。(そのような選択肢の作りをしている問題が多いです。)その後の2度目のリスニングで2つから1つへ絞り込む聞き方をしよう助言しています。

カ)リスニングの指導の際にメモを取って聴くようにと生徒に伝えることがよくあると思います。しかしそのメモを取って聞くといった活動はそう簡単にできることではありません。聞いた内容をそのまま書くのではなくそのメモを後から見て、聞いた内容を記憶として呼び起こしやすい形でメモとして残し、かつすばやくメモ取りを行うようにするにはどうすればよいのか。以前通訳の勉強をしていた頃私自身効果的なメモ取りとして実感したことがあります。縦長のメモ用紙(幅7センチ程度)を用いメモを取ること、そしてその縦長のメモ用紙の中に記載する主語・動詞・修飾語・目的語の位置を常に固定しメモ取りを行うという点です。縦長のメモ用紙を用いることで、大切な要素だけを記録しようとする意識が自然と働きメモの羅列を避けることができますし、また、メモ用紙の中に記載する主語・動詞・修飾語・目的語の位置を常に固定することで、メモを取った内容を見直した際そのメモが言わんとする内容が理解しやすく、短時間で頭に入ってきます。そのメモ取りの要領をセンター試験第4問のリスニング問題のメモ取りにも活用していくべきと考えています。読み上げられる英文の意味内容の区切りごと、あるいはその意味内容の区切りが判断しづらい場合は読み上げられる際の英文と英文の間的小休止があるごとに前述した要領でメモ取りを行うよう指導します。メモを見直した際メモ内容が理解しやすいように、その区切りや小休止には必ず横線でメモに区切りをつけるよう指導します。

リスニングテストの問いには記憶力を問う内容の設問になっているものも多く見られます。センター試験第4問においてもある程度そのようなことがいえると思います。前述しましたメモ取りについての作業を行いながら途切れなく流れてくる英文の内容を理解し、記憶にとどめておくという作業をスムーズに行うためにも記憶力を鍛える訓練が必要になってきます。これも通訳者が行う訓練ですが生徒達も

楽しみながら行うことができ、なおかつメモ取りの有効な訓練にもなりますので教室での指導にも取り入れています。laggingという訓練です。教室で行うlaggingの練習ですが例えば単語を15個ほど1語1語の間にポーズをとりながら教師が読み上げていきます。生徒は読み上げられる単語の最初の単語の後のポーズでは何も言わずに2つ目の単語が読み上げられた後のポーズに最初に読み上げられた単語を声に出します。それを最後の語が読み上げられるまで続けていきます。単語を1つずらすlaggingができるになれば単語を2つずらすlaggingを行います。単語のlaggingができるようになれば短文を用いたlaggingの訓練を行います。最初は日本語で始めてもかまいません。この訓練は記憶力を鍛えるものですので英語にこだわる必要はありません。様々なバリエーションを加え日本語で読み上げられるものを英語に変換しlaggingの練習を行うこともできますしその逆も可能です。もう1つこれも通訳者が行うlaggingの訓練ですが先ほどのlaggingの訓練で最初に読み上げられた単語を2つ目の単語が読み上げられた後のポーズに声に出すのではなく3つ目の単語が読み上げられている最中に最初に読み上げられた単語を読み上げるという訓練を行います。それを最後の語が読み上げられるまで続けていきます。この訓練は第4問のリスニングテストでメモ取りを行いながら次々と流れてくる音声の内容を理解するという作業をスムーズに行う上での記憶力を鍛える訓練として有効な訓練と考えています。この訓練を教室で一斉に行う際には他の生徒や自分の声で読みあげられている単語が聞き取れなくなりますので小声でつぶやくように声を出すよう指導します。

#### 4. 最後に

Overlapping, repeating, shadowing, dictationといった音読訓練や書き取り訓練、速読力とリスニング力は比例するという考えのもと速読力をつける訓練も日々取り入れながらリスニング指導を続けていくことでセンター試験リスニング問題に対して生徒たちの持つ不安感を払拭していければと考えております。